

オーストラリア ラトローブ大学プログラム

SUSAP 2025 SUMMER | 25 Aug 21 ~ Sep 27

Australia Melbourne Bundoora



LA TROBE UNIVERSITY

自己紹介



古賀創臣

理工学部 修士 2 年

様々な人と交流して、異文化に触れ自分の視野を広げるために

参加。



中原寿理

農学部 修士 1 年

様々なバックグラウンドを持つ人々と交流をして英語のみならず、視野を広げるために参加。



下無敷知

経済学部 4 年

大学生活で後悔の残らないように、最後の夏休みを留学に費やすために参加。



小宮由衣子

経済学部 3 年

文化や言語の違いを超えた人との関わり方について学ぶために参加。



豊田彩華

芸術地域デザイン学部 3 年

自分とは異なる価値観を持つ人と交流することで自分自身の生きる意味を知るために参加。



井河祐磨

理工学部 2 年

様々な国の人と出会い、実際の人々の考え方を認識するために参加。



霜田のどか

芸術地域デザイン学部 2 年

初めての留学で、異文化を生活する楽しさや難しさを実

感するために参加。



宇野礼人
経済学部 2年
実際の人々の考え方や英語の発音の仕方など体験してみないとわからぬいものを経験する

ために参加。



萩尾響

経済学部 1年

日本にいるだけでは得られないことを学び、新しい価値観を身に着けるために参加。



土井和奏
農学部 2年
オーストラリア文化とホームステイを体験し、自分自身の成長につなげる

ために参加。



濱田優菜
農学部 1年
大学生活で今までの生活では経験できないことをこのプログラムで経験するために参加。

プログラム概要

【期間】2024年8月19日～9月27日

【留学先】オーストラリア ラ・トローブ大学

【内容】オーストラリアの海外協定校であるラトローブ大学の付属語学学校での英語コースに参加し、レベルにあったクラスで集中的に英語学習を行います。4技能の授業が提供されるため高度な英語スキル向上を目指します。また、ホームステイという滞在形を通して、多民族国家であるオーストラリアの多様な文化や生活様式を体験することができます。

オーストラリアについて

オーストラリアは、壮大な自然とユニークな動植物が魅力の国であり、世界遺産にも登録されているグレート・バリア・リーフや、赤く輝くウルル（エアーズロック）は、観光客に大人気です。さらに、多文化が息づく社会で、都市ではさまざまな国の人々が共に暮らし、それぞれの文化が調和している。

ラ・トローブ大学について

ラ・トローブ大学は、メルボルンに位置する公立の名門大学で、世界ランキング上位300校、アジア・アセアン地域でもトップ50に入る実力派である。世界中から学生が集まり、特に金融やファイナンス、投資分野の研究で高い評価を受けている。

食事

オーストラリアの食文化は非常に多文化的であり、イギリス、イタリア、ギリシャ、アジア諸国など、さまざまな国からの移民の影響を受けています。代表的な料理には、ビーフやカンガルーのステーキ、伝統的なミートパ

イ、そして屋外で楽しまれるバーベキューなどがあります。また、四方を海に囲まれていることから、シーフードも豊富であり、特にエビやオイスターは広く親しまれています。

市場・物価

オーストラリアにおける物価は、特に食品や日用品において高水準であり、日本と比較すると生活費全般が割高である傾向が見られます。一般的には、日本の約2倍とされており、外食費や輸入品の価格も日本より高額とであった。ただし、フルーツなどは、とても安く驚きました。

交通手段

通学には主にトラム、電車、バスの3種類を利用しました。これらの公共交通機関は、マイキーカードと呼ばれる交通用ICカードを購入することで一括して利用可能です。オーストラリアの運賃制度は日本とは異なり、乗車時間に応じて料金が変動する仕組みとなっており、例えば2時間以内であれば距離に関係なく一律約350円で移動できました。

授業

プレイスメントテストの結果に基づき、英語クラスはレベル1から6までに分けられ、私たちはそのうちレベル2からレベル4に配属されました。クラスは5つ以上に細かく分けられており、少人数制であったため、英語を話す機会が非常に多く、授業は月曜日から木曜日の8時50分から15時までの時間帯で実施されました。約30日間の授業を経て、最終日には筆記試験に加え、プレゼンテーションまたはディスカッションが課され、学習成果

を発表する機会が設けられました。



「オーストラリア留学で得た気づき」

修士2年 理工学部 古賀創臣

私はSUSAPのオーストラリアプログラムでメルボルンに留学し、さまざまな人と交流して異文化に触れる中で、自分の視野を広げ、「多様性」の魅力にも気づくことができました。ここでは、メルボルンでの生活から得た気づきと、現地の人との交流の2つについて述べようと思います。

まず、メルボルンでの生活を通して日本との違いを感じたのは、日本に比べて全体的に物事がアバウトだという点です。たとえば、店頭に並ぶ缶の中にはへこんだものが混ざっていたり、図書館や書店では本の分類が大まかで、目的の本を見つけるのに苦労したりしました。また、交通機関に関しても、駅に改札ゲートがない場所が多く、ICカードをタップするための小さな機械が置かれているだけのところもありました。このような違いに触れ、日本の厳しいルールやきっちりとした文化が当たり前だった自分にとっては驚きでしたが、生活するうちに、そのアバウトさはオーストラリアに根づく多様性や寛容さから生まれていると感じました。細かいことにとらわれず、自分のペースで過ごせる環境は新鮮で心地よく感じました。

現地の人との交流も、私にとって貴重な経験や気づきを得る機会となりました。まずは、ホストファミリーです。私のホストファミリーは、ホストファザーがギリシャ出身、ホストマザーがフィリピン出身の家庭でした。2人とも仕事で忙しい中でも、できるだけ会話の時間を作ってくれ、お互いの文化や背景について語り合えたのは貴重な経験でした。特にギリシャについては前提知識がほとんどなかったため、国の歴史や現状などに関する知識も深まりました。また、料理好きな2人がたまに振る舞ってくれるギリシャ料理やフィリピン料理は人生初めて

でしたがどれもおいしく、異国の料理にも興味を持つ機会になりました。

次はクラスのメンバーです。クラスにはアラブ系や中国、カンボジアなど、さまざまな国的学生が在籍しており、授業や休み時間を通して文化や言語の違いについて話す中で、異文化交流の面白さを実感しました。留学前は国ごとのアクセントを意識したことがなかったため、英語が第一言語ではない学生との会話に最初は苦労しましたが、ネイティブの先生が彼らの英語を自然に理解している姿を見て、原因は相手の発音ではなく、結局自分の英語力であると気づかされました。その後、毎日話すうちに少しづつ慣れ、アクセントにおける多様性にも魅力を感じるようになりました。

休日や放課後は、バディや現地の学生とカラオケやハイキング、美術館やバーなどに遊びに行っていました。現地で交流した学生は日本文化について興味を持っている人が多く、漫画やアニメ、音楽など想像以上にみんな詳しく、また日本語を流暢に話す学生も多くいて、感心すると同時に、日本の世界に与える影響力を実感しました。初日は英語をうまく話そうと意識しすぎて話しかけるのを躊躇することもありましたが、現地の学生はとてもフレンドリーで話しやすく、次第に細かいことは気にせず、とにかく積極的に話しかけようというマインドに変化し、最終的に自信をもって話しかけられるようになりました。その経験が自分にとって大きな財産になりました。また、この40日間の留学を通して、現地の学生とも親しくなり、今後も関係を大切にしていきたいと思える友人できたことも人生における貴重な財産になりました。



SUSAP を通して学んだこと

修士1年 農学部 中原寿理

オーストラリアでの40日間を通して、さまざまなバックグラウンドを持つ人たちと交流することで、英語力の向上だけでなく、異なる文化や価値観に触れ、自分の視野を大きく広げることができました。この留学を通して感じたことや学んだことを3つに絞って紹介します。

1つ目は、英語でのコミュニケーションに対する考え方の変化です。オーストラリアに来る前は、「正しく話さなければいけない」という気持ちが強く、英語を話すことに少し抵抗がありました。ですが、実際に現地で会話してみると、文法の正しさよりも伝えようとする姿勢の方がずっと大切だということに気づきました。言葉だけで伝わらない時には、ジェスチャーや表情、写真なども使いながら工夫して伝えるようにしました。ホストマザーや大学の友達とのやりとりを重ねるうちに、英語で話すことがどんどん楽しくなっていきました。大学の友達とは、お互いの国や文化や行事、大学生活などについてたくさん話しました。そのうちに「もっと自分の考えをしっかり伝えたい」という気持ちが強くなりました。

2つ目は、自分の意見を持ち、それを相手にはっきり伝えることの大切さを学びました。日本では、遠慮したり相手の気持ちを優先したりすることが多く、はっきり意見を言う人は少ないように感じます。私もその一人でした。

たが、ホストマザーによく「どう思っているのか、遠慮せずに言ってね」と言われました。おしゃべりの中でも意見を求められることが多く、自分の考えをしっかり持つ必要があると感じました。大学の授業でもディスカッションの機会が多く、他の国的学生たちは積極的に発言していました。最初は間違えることが怖く、発言をためらうこともありましたが、少しずつ自信を持って話せるようになりました。さらに、クラスメイトと自国の政治や社会問題について話す中で、彼らが自分の国をよく理解し、しっかりとした考えを持っていることにも感心しました。私はこれまで政治や国の問題にあまり関心を持っていなかったので、これを機にもっと自分の国について学ぼうと思いました。特に移民問題の話をした時には、オーストラリアが多民族国家である一方で、日本と似たような課題も抱えていることを知り、とても印象に残りました。3つ目は、日本との文化の違いについてです。オーストラリアでは水不足の影響もあり、節水への意識がとても高いと感じました。お風呂は基本的にシャワーのみで、時間も10分ほどと決められています。他にも、食器は食洗機がいっぱいになるまで洗わないなど、生活の中に環境を意識した工夫が多く見られました。

また、留学前は「海外の人はみんなフレンドリーで、誰とでもすぐに仲良くなれる」というイメージを持っていましたが、実際は人それぞれで、日本と同じようにさまざまな性格の人がいることに気づきました。それでも、明るく気さくに話しかけてくれる人が多く、特に別れ際に「Have a good day!」や「Have a lovely day!」と声をかけてもらうと、とても

幸せな気持ちになりました。大学では、Hakamanakama の友達や先生方が、授業や日常生活の中でさまざまなことを優しく教えてくれました。発音に悩んでいたときには、一緒に練習してくれるなど、親身にサポートしてくれたことが印象に残っています。さらに、オーストラリアの人たちは表情が豊かで、思ったことを素直に表現し、人目をあまり気にせず自分らしく過ごしているように感じました。その姿がとても印象的で私もそうなりたいと感じました。

この 40 日間はあっという間でしたが、これまで最も充実した時間を過ごすことができました。英語だけでなく、人との関わり方や自分から行動する力も大きく成長できたと感じています。これからの学生生活でも、今回の経験を生かし、興味を持ったことには積極的に挑戦しながら、自分らしく成長していきたいです。



SUSAP 報告書

経済学部 4 年 下無敷 知

私の約 40 日間のオーストラリア・メルボルンでの経験、学びをまとめます。SUSAP のメルボルンプログラムに応募したきっかけ、ホームステイ先での経験、現地大学での学び、現地学生との交流、最後に全体のまとめを書きます。

はじめに、私が SUSAP のメルボルンプログラムに参加したきっかけです。最も簡潔に述べるのならば、自身にとって最後の夏休みを後悔したくないという想いが大きかったことがきっかけです。来年度から社会人として働く私にとって、今夏季休暇が最後の留学のチャンスでもありました。1 年次から留学へ行きたいという気持ちは大きかったですが、一步踏み出すことができない状態が続いていました。しかし、就職活動を 3 年次に行い、自分のキャリアビジョンを考えた際に、国外の多様な価値観を学ぶ必要性があると感じました。また、小学生から学んできた英語がどれほど実用的に役立つスキルとなっているのかを知りたいという想いも強く、今回、メルボルンプログラムに参加しました。

ホームステイ先は、日本文化とは異なることが多い、驚きの連続でした。私を受け入れて下さったホストファミリーは、ギリシャの方々でした。オーストラリアは多文化国家であるため、様々なバックグラウンドをもった

方々で溢っていました。ホストファミリーはキリスト教徒であり、毎週末には一緒に教会へ連れて行って下さりました。日本では冠婚葬祭時には宗教が国民に影響を与えているものの、常日頃から宗教が生活とともににあることに初めは驚きがありました。

ホストマザーが AFL (Australian Football League) が好きなこともあり、2 回ほど試合観戦に連れて行ってもらいました。MCG というオーストラリア最大のスタジアムには最大 10 万人が入り、熱気で溢れかえっていました。熱狂的なファンが多く、見知らぬ人とも仲良くなり、一緒に応援する雰囲気は日本では味わえないであろうものでした。

次に現地大学での学びです。私たちは、La Trobe College で 5 週間学習をしました。この期間で大きく感じたことは、日本人は読解力に長けているが、話す力が劣っているということです。逆にアラブ系の学生やヨーロッパ圏の学生は、読解力は劣っているが、話す力にとても長けているように感じました。話す力というのは、躊躇せずに積極的に会話をする力という方が分かりやすいかもしれません。文法や単語が間違っていても、自分の意見を他人に“伝える”力がありました。私もミスを恐れずに口に出す、そしてボディーランゲージなどの非言語コミュニケーションも使いながら“伝える”ということを意識して現地大学で過ごしていました。どのような形であっても伝わると嬉しいし、間違っていたとしても次の成功のきっかけとなり、英語力向上の大変な一歩であったと感じています。



次に現地学生との交流についてです。現地大学には、HAKAMA NAKAMA（袴仲間）という日本文化に関心のある学生が集まるサークルがありました。彼らと共に放課後に市内に買い物に行ったり、ご飯を食べたり、週末にはハイキングや動物園に行くなど沢山の交流がありました。私が現地学生と交流して感じたことは、Face-To-Face のコミュニケーションを大事にしている点です。人と直接意見を交わすということを無意識的に入っている学生が多く、嬉しい感情も悲しい感情も直接共有できたことが非常に嬉しかったです。



最後に、今回のメルボルンプログラムを通じて、沢山の考えに触れ、沢山の場所を訪れる中で自分が今まで大切にしていた価値観を再認識することができました。また、多くの違う角度からの視点も学ぶことができたとともに、もう少し早く挑戦すべきだったという後悔もありました。これから参加を考える学生には、少しでも早い時期での挑戦を是非お勧めしたいです。ありがとうございました。

<今回の短期留学を通して>

経済学部3年 小宮 由依子

私は大学のプログラムを通じて、40日間オーストラリアに留学する機会を得ました。この貴重な体験を通して、文化や言語の違いを超えた人との関わり方や、自分自身の在り方について多くのことを学びました。特に①自己主張の大切さ、②異文化を受け入れる体制の充実さ、③コミュニケーション能力の高さ、④課題解決力という四つの観点から得た学びは、今後的人生においても大きな糧になると感じています。

まず、①自己主張の大切さについてです。オーストラリアでは、授業中でもディスカッションや意見交換の機会が多く、自分の意見を明確に述べることが求められました。日本の教育環境では、「周囲に合わせること」が重視されがちですが、オーストラリアでは「自分の意見を持ち、それを根拠とともに伝えること」が尊重されます。最初は自分の英語力に不安があり、発言をためらうこともありましたが、現地の友人や先生方の励ましによって、徐々に自信を持って発言できるようになりました。この経験を通して、自分の意見を言葉にすることは、相手との信頼関係を築くための第一歩だと気づくことができました。今後は日本においても、チームでの活動や議論の場では積極的に意見を述べ、建設的な議論ができるよう心がけていきたいと思います。

次に、②異文化を受け入れる体制の充実さにつ

いてです。オーストラリアは多民族・多文化国家であり、さまざまな背景を持つ人々が共に生活しています。大学のクラスメイトの中にもアジア、ヨーロッパ、中東などから来た留学生が多く、食文化や価値観の違いに驚くこともありました。しかし、それらの違いを尊重し、理解しようとする姿勢が社会全体に根付いていることを感じました。現地の人々は、たとえ文化的に異なる相手であってもオープンに接し、「違い」を受け入れることを当たり前のこととして捉えていました。このような環境に身を置いたことで、「異なること」は決して否定されるべきではなく、むしろ新しい視点を得るチャンスであるという意識が芽生えました。今後は、日本でも国際的な場面が増えていく中で、他者の文化や考え方を柔軟に受け入れる姿勢を持ち続けたいと思います。

③コミュニケーション能力の高さも重要な学びでした。言語の壁がある中で、どうすれば相手に自分の意図を正確に伝えられるかを常に意識して行動しました。単に英語を話すだけではなく、身振りや表情、聞く姿勢など、非言語的な要素も含めた総合的なコミュニケーション力が求めされました。また、相手の話をただ聞くだけでなく、適切な相槌や質問を交えることで、会話の質が深まることも学びました。こうした経験は、日本語でのコミュニケーションにおいても大いに活かせると感じています。今後は、職場や地域社会などさまざまな場面で、相手との信頼関係を築けるようなコミュニケーションを意識していきたいです。

最後に、④課題解決力についてです。留学生活では、言語の違いによるトラブルや授業内容の

理解不足、文化の違いによる誤解など、さまざまな困難に直面しました。例えば、授業でわからない点があれば、積極的に教授や他の留学生に相談することで乗り越えることができました。また、街へ出かけた時も様々なトラブルがありました。その際、パニックにならずに集団行動の中で落ち着いて行動し、現地の人に尋ねてみるとことの大切さを再確認しました。これらの経験から、「問題が起きた時にどう対応するか」が大切であり、自ら行動し、周囲の協力を得ながら柔軟に対応することが課題解決には不可欠であると実感しました。今後は、この力を活かし、社会人としてのさまざまな課題にも前向きに取り組んでいきたいと考えています。

以上のように、オーストラリア留学は私にとって、自分を見つめ直し、成長させる大きなきっかけとなりました。これから的人生において、留学を通して得たこれらの学びを忘れず、グローバルな視点を持って主体的に行動できる人間でありたいと強く思います。



(クラスのみんなとの写真)



SUSAP 報告書

理工学部 2 年 井河祐磨

今回 40 日間という短い間ですがオーストラリアに行ってみて多くのことを学び経験した。まずラトローブ大学で月曜日から木曜日まで英語力向上のため勉強したが、ここでも多くのことを学んだ。まず佐賀大から共に行った 11 人の日本人はもちろん、サウジアラビア人、カタール人、イタリア人、オーストラリア人とたくさんの人種の人が一つの大学にいるため英語だけでなく異なる国の文化や言語などを学ぶことができた。ここで自分が特に良かったなと思う点はその国の文化や人柄、考え方を学ぶことによってその国に対して自分が前から持っていたイメージが変わった点である。行ったことない国、その国の人を知らないとニュースなどで得る情報のみで勝手に想像して概念化してしまいますが、今回の経験を経てそれがかわっていったことは一つの成長であると感じた。次に今回 40 日間ホームステイだったのだが、ホームステイでよかったと思う点がたくさんだったのでそれについて述べようと思う。まず自分はお父さん、お母さん、猫 1 匹が暮らしている家に住ませていただいた。お父さんもお母さんも忙しそうでしたがとてもアクティブで休みの日になるたびにビーチや森、街などいオーストラリアを象徴するいろんなところへ連れて行ってくれた。特に印象的だった場所が 2 つあり一つ目は、ボラ山で行ったキャンプだ。キャンプと聞くと日本でもできるし別にオーストラリア感はないと思うが、このボラ山にはみたことないぐらい

高い木や、みたことない動物がいたり、そして何より山自体がとても大きく広いため土地が凄まじく広くて気持ちが良かった。しかもホストファザーはちゃんとしたキャンプを普段からやっているためテントの中で寝袋を使って寝たり、朝は野生で卵とベーコンを焼いて食べたりととてもワイルドな生活が送れていい経験になった。2 つ目はドライブで海の方に連れて行ってくれたことである。いろいろな種類の海に連れて行ってくれたが、最も印象に残ったものは国際的なサーフィンの競技に使われるような海でとても波が高く、多くのサーファーで賑わっていた。そこも谷が深く日本の海とはまた違う雰囲気で、向こうは冬だったがぜひ入ってみたいなと思うぐらい綺麗だった。オーストラリアにいって自分というものを主張することの大切さをしみじみと実感した。自分を主張しないと誰も助けてくれないし、物事が勝手に進んでいく。それを避けるためにも、そこで楽しく暮らすためにもしっかり自分を主張して自分という存在をアピールしなければならないと感じた。





SUSAP 報告書

芸術地域デザイン学部 2 年 霜田のどか

私が今回のオーストラリアへの留学で学んだことは主に二つあります。一つ目は、異文化で生活することの楽しさと大変さです。私は、今回の SUSAP で初めて海外を訪れたので、日本とは全く違う景色や街並みにとてもわくわくしました。週末にシドニーに旅行してボンダイビーチに行つたときは、きれいで暖かい海に感動しました。シドニーはメルボルンよりも暖かく、ビーチがたくさんありました。また、みんなでハイキングをして野生のカンガルーの群れを見たのも良い思い出です。大きい個体は 2~3 メートルほどあり、筋肉質で少し怖かったです。このように楽しい思い出をたくさん作ることができました。

しかし、大変と感じたこともあります。異文化コミュニケーションに関する事前授業で、カルチャーショックとその対処法について知っていましたが、日本とは衛生観念が違って少しストレスを感じましたし、メルボルン市内で大規模デモや銃撃事件があったときには恐怖を感じました。日本での当たり前が海外では通用しないこともあるという経験ができる良かったです。

私が学んだことの二つ目は、オーストラリアで出会った人々のフレンドリーさや優しさです。私のホームステイ先のおばあちゃんは本当に優しくてあたたかい方で、感謝してもしきれません。いつも私たちのために何種類ものお菓子を作ってください、晩御飯では私たちが好きなメニューを作ってくださいました。そして私がかぜをひいてしまったときには看病してくれま

した。おばあちゃんの息子さんは毎日私たちの家に来て、気さくに話しかけてくださいました。街中でも、たまたま駅のホームで出会った犬を連れた人と仲良くなっこことから、オーストラリアは気さくでフレンドリーな人々が多いと感じました。

英語学習の面について、今回の留学では、英語の四技能をバランスよく授業で鍛えることができました。特に実生活におけるスピーキングとリスニングの力の成長を感じました。オーストラリアの訛りが入った英語は日本でなかなか触れる機会がなかったので、勉強になりました。そしてオーストラリアは移民が多いので、非ネイティブの方の英語に触れる機会も非常に多かったです。実際に学校では、ベトナムやインドネシアなどからの生徒が多く、聞き取るのに苦労しました。

最後に、私はこの留学で異文化にはじめて触れて、オーストラリアの人々と暖かい交流を持つことができました。この経験を忘れずに、これからも学校生活と英語学習に取り組んで、グローバル社会に貢献できる大人になっていきたいです。





SUSAP 報告書

農学部1年 濱田優菜

私は大学入学後、大学と家をただ往復する一だけの退屈な毎日が続いていました。そんな私を見兼ねた両親が短期留学を勧めてくれました。大学入学後、ずっと惰性で生活していた私が、馴染みのない土地で5週間も過ごすなんてあまりにも過酷だと思いました。しかし、両親の熱意に負けて参加することになりました。

現地の大学では、事前に受験した試験によってクラスが振り分けられました。私のクラスでは、エッセイとディスカッションを中心とした授業が行われました。そこでは、ただ闇雲に自分の意見を伝えるのではなく、適切な表現を選択し自然な意思疎通を図ることが重要であると教わりました。私はそれまで、英文の構造ばかり考えて、英語がコミュニケーションの手段であるということを忘れてしまっていたと思います。会話の上手な他の学生を見ながら、私は凄く劣等感を感じました。しかし、この気持ちが私を突き動かすエネルギーになりました。短い期間でしたが、私の英語力は大幅に上がったと感じています。

また、ハカマナカマクラブでの活動もとても楽しいものでした。このクラブでは日本の文化に興味のある学生が集まり、イベントを通して交流が行われていました。夜に開かれるマーケットに行ったり能のお面を作ったりしました。イベントの合間にクラブのメンバーから、英語の発音レッスンをしてもらったり

り彼らの生い立ちを聞いたりしている時間は、楽しくて仕方がなかったです。みんな優しく思いやりのある方ばかりでした。

私はこの留学を通して、大切な仲間と出会うことができました。現地で出会った学生だけでなく、共に留学をした佐賀大生の中でも心から大事にしたいと思える友人ができました。豊かな人間関係は平凡な人生を物凄く楽しいものにしてくれると再認識しました。

オーストラリアでは様々なルーツを持った人々が暮らしています。彼らには多文化を受け入れるだけでなく、多様性があること自体を国の強みと考える寛容さがあると思いました。これは日本とは大きく異なる価値観であり、とても魅力的な部分だと思います。一つの国を理解するのに五週間という期間は不十分だと思います。来年度から交換留学にも参加して、まだ知らない側面を見たいと考えています。

今回の留学経験は以前では考えられないほど私を教えてくれました。自分の意思で挑戦したものではありませんでしたが、参加して良かったと心から思っています。自分では前向きに考えられていないことがとても大切な経験になり得ることを身をもって分かりました。今後もこういった挑戦を大切にしていきたいです。

